南京図書館にての図書調査

雷　国　山

通　訳

1998年秋から今までの3年間、笠谷和比古先生をはじめとする調査団が3回にわたって、南京図書館へ調査においでになりました。3回とも私は参加しましたが、主に通訳を担当しましたので、別にたいしたこともしませんでしたが、今度日文研から、報告書を提出するように、ということですので、ここ3年来の調査の回顧をしてみたいと思います。

第1回の調査に関しては、1999年3月19日の日文研での私の発言の原文を引用しながら説明させていただきましょう。少し長くなりますが、初回調査の詳しいありさまが記録されていると思います。(2001.3.15)

南京地方に伝存する明治前後の日本語原版図書の調査について
――南京図書館を中心に――

皆様

この前（1998年10月27日～30日）笠谷先生と歌野先生が南京へ図書調査に来られた際、私は事前連絡のために南京図書館へ行きました。応対してくれたのは副館長の宮愛東氏（女性）でした。宮副館長の話では、江蘇省外事管理公室の許可書があれば問題はないということでしたが、笠谷先生と歌野先生一行はおそらくその許可書を持っていないと予想し、先生方の今度の調査が順調に進められるかどうか大分心配していたのです。

26日の夜、笠谷先生と歌野先生の一行は珍珠飯店にお泊りになりました。この時に至っても許可文書類などはまだ持っておられず、これを見た私は「しまったな！」と思いました。幸い翌27日の朝やっと中国社会科学院からの証明文書が届き、私はほっとしました。そこで私たちはこれを持って急いで珍珠飯店のすぐ近くの南京図書館へ行きました。当館古籍部の責任者である宮愛東副館長はすでに古籍部に行っている、と本部の係員から教えられ、私たちはまた急いで古籍部へ赴きました。

簡単ながら正式な挨拶のあと、宮愛東副館長はコンピュータで南京図書館所蔵の日本原版図書関係のものを検索しはじめました。このあと徐主任（女性）に協力の方が任されました。しばらくして選定された古籍の一部が目前に運び出されました。やや新しくて古いものではないと思われ、笠谷先生と歌野先生はその場で「書庫に入ってみたいのですが、よろしいですか」と直接希望されましたが、「まだちゃんと整理しておいていない」という理由で拒絶されました。やり取りを繰り返しましたが、結局無駄でしたので

しょうがなく、提供してくれた『中国各図書館館蔵日本図書連合目録』に載っていないものがきっとあるだろう、という思いに基づき方針を転じて「じゃ、カード目録を見ていいですか」と宮愛東副館長に依頼しました。今度は許されました。

こうして、私たち3人は、カード目録検索の作業に着手し始めました。笠谷先生と歌野先生のご推測のとおり、同連合目録に載っていない日本語原版の古籍が次々と、出てきました。当時のお2人の先生のお気持ちはどうだったか知りませんが、私の方はとても嬉しかったのです。

以上はこの前の図書調査の主な目標であった南京図書館をめぐる調査実施のあらすじです。当調査の結果（データ）についての分析などは、昨日すでに歌野先生によって発表されました。以上です。

次は1999年3月18日の歌野先生の日文研での発表レジュメの原稿です。

中国伝存の日本関係資料に関する総合調査

【南京地区調査の報告】

1） 調査期間

1998年10月26日～10月28日

2） 調査対象

南京図書館古籍部（宮副館長）

3） 調査者

笠谷和比古・歌野博・雷国山　＊南京大留学生

4） 調査方法

日本人名を手がかりにした、著者名カード目録の悉皆検索　該当カードの転写

5） 調査結果

医学書、漢学書を中心とした200　冢田子常文庫？

6） 課題

・現物の精査

・書庫立ち入り調査（目録外資料）

・現地事情を考慮したアプローチ／江蘇省 外事局

・日中共同プロジェクト化

要するに、1回目の調査の一番大きな収穫は、カード目録には同『連合目録』に載っていないものがある、ということだと言っても言い過ぎではないと思います。ただ、時間がきつかったので、目録悉皆検索をしようと思っても無理だから、次回に譲ろうと決めました。

第2回調査の実施は次の通りです。

実施期間　1999年9月6日～9月8日
調 査 先　南京図書館古籍部
調 査 者　笠谷和比古・歌野博・戦暁梅・辻垣晃一・雷国山（非常勤）
接 待 役　古籍部 徐主任
調査方法　カード目録を全般検索
調査結果　収穫が大きい。具体的データは歌野先生のご報告をご参照下さい。

以上の通り、私は非常勤で、通訳の担当は主に戦さんだったので、図書館側とのやりとりの具体的な有り様も、調査の成果も知らないのです。ただ9月8日には、午前中、戦さんと歌野先生が宮副館長を図書館本館まで探しに行ったところ、宮副館長は不在という事であった。たぶん、お二人は交渉のために行ったのでしょう。

第3回調査のあらすじは、歌野先生の2001年2月19日の日文研での発表から窺えるでしょう。

南京図書館調査報告―総括と展望

歌野　博

1．南京図書館の沿革・概要
江南図書館（1907）→第四中山大学図書館（1926）→国立中央大学図書館（1927）→江蘇省立国学図書館（1929）→国立中央図書館（1933）→国立南京図書館（1950）→南京図書館（1954）

＊1948年、古籍13万冊、台北へ
＊成賢街（本館）―　1949年以降の中文図書雑誌、外国文献
虎踞路（古籍部）―　古籍善本
龍蟠里　民国時代の公文書、記録類
＊680万冊（善本1万部、10万冊）―　1995年現在
＊古籍部
・古籍150万冊（珍貴的善本書10万余冊）；50万冊（最善本1万冊）
・八千巻楼（丁丙）、木樨香館（范）、天放楼（趙）、群碧楼（鄧）
沢存書庫（陳群）
・日本、朝鮮、越南等の古代文献

2．第三次調査
調査期間　2000年9月26日～9月28日
調 査 者　笠谷和比古・王勇・歌野博・辻垣晃一・武内恵美子
＊傅璇琮・張暁敏先生
調査方法　陸忠海氏作成リストをもとにした現物書誌調査
表紙、序、刊記等のデジタルカメラ撮影

調査結果　和刻漢籍、準漢籍等62点
論語注釈書　―　集注・集解の注釈・考訂
医書　―　金匱要略注釈書
仏書・佚存叢書・景宋本爾雅（松崎慊堂私家版）
＊日本古典籍リスト作成委託

3．南京図書館所蔵日本古典籍収蔵源流
a．八千巻楼蔵書　―　丁丙（1832―1889）、嘉恵堂、15532種
b．沢存書庫　―　陳群、汪兆銘政府内政部長、自害
c．冢田子常旧蔵書　―　江戸後期、信濃の医者、石川県立図

4．概括と展望　―　調査する側の勝手される側の論理・ソウル大学

加えて言いますと、今度の調査は、主に陳群の沢存書庫についていろいろ宮副館長にお尋ねし、宮副館長も比較的詳しく説明して下さいました。ただ、調査側が示した陸忠海氏が作ったリストについては、宮副館長は「それには漏れているところが多い」と主張しています。そして、「日本古典籍リスト作成委託」ということは、王勇先生と宮副館長との交渉の結果なのですが、2001年2月21日の午後竹藪を散歩した時、笠谷先生から「リストは届いていない」と教えられ、とても残念なことだと思いました。

展望――明日のために

ここ三年来、笠谷先生をはじめとする「中国に伝存の日本関係典籍と文化財」についての調査は、いろいろな困難を伴ってきましたが、とても大きな成果をあげたと思います。次は、第17回国際研究集会の様子について、ひとこと言わせていただきます。

第一に、もともとの調査対象は、明治前後中国に流出した書籍でしたが、しかし、思いがけず、1930年代～1940年代のものにまで調査が及んでしまいました。満鉄などがそれです。満鉄といった史料はもちろん意義もありますけれども、最初の対象設定とはちょっとずれているのではありませんか、というのが私の考えです。

第二は、第一と関わっていますが、調査の焦点を明治前後にしぼったほうがいいと思います。横山邦治先生が大連で遭われた体験と笠谷先生が南京で遭われた体験は性質が一緒だと思いますが、中日戦争を避けての調査は進みにくいのです。図書調査にもかかわらず、中日戦争でたいへん被害を受けた中国大陸の国民にとっては、どうしてもあの戦争の傷が癒しにくく、両国交際時に敏感となる点です。これが横山先生がおっしゃった「不信感が深い」の原因だと思います。

第三に、調査の実施形式についてです。両国共同調査の形式で行なったらいかがでしょうか。はっきり言いますと、委託調査をとった方がもっと効果的だと思います。日文研の方はご存じかどうかは分かりませんが、実は、2000年に新しく発布された『統計法』では、これからの海外からの調査は皆中国国内の関係機関に委託すべし、と規定しているのです。従っ

て、もし中国の法律を知らなければ、調査はなかなか進められないかもしれない、法律違反のおそれが中国側の協力者にありますから。とにかく、文部科学省のプロジェクトであります以上、公的形式を採用することが可能であると私は信じているのです。

第四に、調査の目的を改めて調査地の責任者に説明すること。調査の目的が相手によく分かっていただけないと、誤解が起こる恐れが大きい、つまり、調査の動機が疑われます。そうなると、調査の目標が達成できないのです。たとえば、南京図書館での第3次調査の終わりの頃、王勇先生が宮副館長と委託調査のことを交渉しているうちに、急に宮副館長から「彼等の調査の目的は何ですか？」と聞かれました。ですから、調査の理由を十分に相手に分かっていただけなければ、協力してくれないのだと思います。